

農試第 143-7 号  
令和 2 年 7 月 9 日

各関係機関の長 様

福井県農業試験場長  
(公印省略)

農作物病害虫発生予察特殊報第 1 号の送付について

このことについて、下記のとおり発表しましたので送付します。

連絡先 福井県農業試験場 病害虫防除室 TEL 0776-54-5100(代表) 0776-54-9315(直通) FAX 0776-54-6403 E-mail byogaichu-boujo@fklab.fukui.fukui.jp
---

令和 2 年農作物病害虫発生予察特殊報第 1 号

## ツマジロクサヨトウの発生初確認

1 病害虫名 ツマジロクサヨトウ (チョウ目、ヤガ科)

2 発生植物 飼料用トウモロコシ

3 発生経過

令和 2 年 7 月 7 日、福井県内の飼料用トウモロコシ圃場において、ヨトウムシ類幼虫および食害が確認されたため、名古屋植物防疫所伏木富山支所に同定を依頼した結果、7 月 9 日にツマジロクサヨトウと診断され、県内では初めての確認となった。

4 特徴

(1) 分布、国内での発生状況

本種は南北アメリカ原産で、2016 年にアフリカ大陸で発生が確認された後、2018 年までにアフリカ中南部のほぼ全域に分布が拡大し、2018 年にはインド、スリランカ、バングラデシュ等の南アジア、タイ、ミャンマー、2019 年には中国、韓国、台湾でも発生が確認されている。

国内では、令和元年 7 月に鹿児島県の飼料用トウモロコシで初めて本種の発生が確認された。

(2) 寄主植物

アブラナ科 (カブ等)、イネ科 (トウモロコシ、イネ、サトウキビ等)、ウリ科 (キュウリ等)、キク科 (キク等)、ナス科 (トマト、ナス等)、ナデシコ科 (カーネーション)、ヒルガオ科 (サツマイモ等)、マメ科 (大豆等) など 80 種以上の作物を加害する。

ただし、現在のところ、本県における寄生確認作物は飼料用トウモロコシのみである。

(3) 形態および生態

成虫は開張約 37mm、雌雄で外観が大きく異なり、雄のみ前翅中央部に白斑を持つ。終齢幼虫は体長 40mm で、頭部の逆 Y 字および尾部の斑点が特徴である。卵は寄主植物に塊状に産み付けられ、雌の体毛で覆われる。

本種は暖地に適応した種（南北アメリカ大陸の熱帯～亜熱帯原産）であり、熱帯では年 4～6 世代発生する。南北アメリカでは毎年夏季に成虫が移動・分散するが、暖地を除く地域では越冬することはできない。

(4) 被害

本種は幼虫が新葉の葉鞘部や若い子実を食害する。摂食量が多く、食害部には多量の糞が散在する。

5 防除対策

(1) 多発すると、被害が拡大する恐れがあることから、圃場をよく見回り幼虫の早期発見に努める。

(2) 現在のところ、ツマジロクサヨトウに登録がある農薬はないが、福井県は、植物防疫法第 29 条第 1 項の規定に基づき、国が指定する薬剤を用いて防除指導を行うこととする（下記の農林水産省ホームページ URL 参照）。

[https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/keneki/k\\_kokunai/tumajiro.html](https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/keneki/k_kokunai/tumajiro.html)

(3) 散布にあたっては、新葉の葉鞘基部に潜り込んでいる幼虫に届くよう、株の上部までしっかりと散布する。また、老齢幼虫や作物の内部に潜り込んでいる幼虫には農薬の効果が低くなるので、本種の活動が活発になる早朝に、若齢幼虫や葉の表面にいる幼虫に対して、農薬を散布することが望ましい。

(4) 農薬の使用にあたっては、散布は無風または風が弱い時に行うなど近隣に影響が少ない天候や時間帯を選び、風向、防除器具のノズルの向き等にも十分注意するとともに、隣接農作物の栽培者に対して散布予定農薬の種類や散布時期等を事前に連絡するなど、農薬の飛散（ドリフト）に留意する。

(5) 幼虫の分散を防ぐために、収穫後は直ちに耕耘する。



写真1 ツマジロクサヨトウ老齢幼虫（約 40mm）



写真2 ツマジロクサヨトウ成虫 (雄)



写真3 ツマジロクサヨトウ成虫 (雌)



写真4 ツマジロクサヨトウによる被害株

※写真は農林水産省原図